

三商レポート

第九十七話 「死ぬことと生きること」

相続フラザ (株)三商 内藤 雄

〒187-0003 小平市花小金井南町 1-14-24

私事で恐縮です。

食が細くない体重が減り始めたため、6月に検査を受けました。

その結果は、「末期の胃ガン」「治らない」「平均余命1年」という予期せぬ診断でした。

「そうか、死ぬのか。それまでどう生きようか。」を考えるようになりました。

まだ10年は現役で仕事を続けると思い込んでいましたので、「余命1年」と言われても実感がありません。相続に関する仕事や相続のセミナーなどで、「人は必ず死にます。だからこそ、元氣なうちにやっておくべきことがあります。また、自分の相続を考えることは、その日までいかに充実して生きるかを考えることでもあります。」とお伝えしてきました。しかし、理屈で考えたことであり現実味がありませんでした。ところが、私自身の余命が宣告をされた今、「やはり死ぬことと生きるとは、同時にセットで考えるべきことなのだ」と確信するようになりました。

検査後、直ちに入院しました。今後、口から飲食できなくなることを想定し、腸から栄養剤を注入するための手術を行いました。そして、抗がん剤の治療が始まりました。ティエスワンとシスプラチンを併用する標準的な化学療法です。5週間を1クールとし、3週間の投薬と2週間の休薬を繰り返していきます。早速、吐き気に悩まされました。抗がん剤は、がん細胞を叩くと同時に正常な細胞にもダメージを与えます。そのためか、菌が血液中に入り敗血症になりました。激しい痙攣と高熱のあと、抗生物質による治療が始まりました。白血球や血圧を上げるための注射・採血・何本もの点滴が連日続き、尿は管から垂れ流しです。ベッドから動けません。

こうした状況のとき、7年前に亡くした娘のことを思いました。娘は、2日後には22歳の誕生日を迎えるはずでした。それまで長い闘病生活を送っていました。親として「絶対に死なせるわけにはいかない」との思いから、辛い治療を無理やり受けさせてきました。娘は一度だけ親に激しく抵抗しました。

「こんなことをするために生れてきたんじゃない!」と。

その後、自分らしく生き、短い人生を終えました。

その娘をベッドで思い、娘の生き方に学びました。

「今の状況は、自分らしい生き方ではない。そうだ！抗がん剤治療をやめよう。」と。

治療方法の選択は、生き方と同じように人それぞれ違います。

可能性がある限り、あらゆる治療法に挑戦し最後までがんと闘う生き方もあります。

薬物療法だけでなく、代替療法に活路を見出す生き方もあります。

周囲の励ましに応えるためにも、厳しい治療に耐える生き方もあります。

私の場合、抗がん剤を止め、病院ではなく自宅で家族と共に自然で穏やかな生活をするを優先しました。幸い家族がいます。しかも、わずかであっても残された時間があります。この時間を家族と共に過ごそうと決断しました。すると、気持ちがスーッと楽になりました。

決して生きることをあきらめたわけではありません。体はがんで病んでいても、心までは病んではいません。持って生れた自然治癒力や自己回復力も活用しながら、残りの時間を生きて行こうと思います。

幸い、がんは時間を与えてくれています。また、家族のほかに、相続アドバイザー協議会・相続学校・野口塾・日本相続学会を通じ、素晴らしい仲間にも恵まれています。まだできることがあります。だからこそ、これからの自分の生き方が大切になってきます。いい生き方をしようと思います。まだまだ人生修行ができることを嬉しく思います。ただし、これからは楽しく、わがままな修行にしたいです。

(2012年8月1日)

～いつも「三商レポート」をお読みいただきありがとうございます～